

ポリネシアの賢人 篠遠喜彦先生を偲ぶ

同窓会会員：石橋正彦

投稿日：2017年10月25日

数日前の新聞でハワイ・ビショップ博物館のポリネシア考古学者・文化人類学者の篠遠喜彦博士がハワイの病院で老衰のためご逝去された旨の記載を見つけた。94才であった。私は81年に「太平洋諸島の野生ネズミ類による被害調査」という文部省科学研究費海外学術調査研究で、サイパン、グアム、ポナペ、コスラエ、マジロウ、ナウル、アピア、パゴパゴ、ヒロと、研究仲間とネズミ捕りをして回った際にホノルル空港の近くにあるビショップ博物館（Bishop Museum <https://www.bishopmuseum.org/>

ハワイに行ったらぜひ見て来るべき素晴らしい博物館です！）を訪問した際にお目にかかり、すっかりそのお人柄にほれ込んだ先生である。



篠遠先生は東京生まれ。お父上は日本のメンデル紹介・研究で有名な植物学者 篠遠喜人博士。奥様の和子夫人は日系移民の歴史を研究した歴史学者の由。先生は1954年、アメリカのnativeの人達の旧石器文化を学ぶためにカリフォルニア大学バークレー校に留学する途上、ハワイに立ち寄った際に、ビショップ博物館のDr. K. Emoryのハワイ島サウス・ポイントでの発掘調査を手伝ったことから、そのままハワイに住みついてしまい、ビショップ博物館でポリネシア、すなわち北のハワイ、南西のニュージーランド、太平洋の東の果てのイースター島を結ぶ大きな三角形の地域、の考古学・文化人類学研究、さらにハワイ人のルーツ探究に生涯をかけて取り組み、主として仏領ポリネシアで遺跡の発掘調査・研究をされ、南太平洋のタヒチからハワイへ人類がどのようにして移住してきたかを中心に研究をされてこられた方である。

わが国で遺跡について研究するとなると出土する土器が編年材料として利用するが、太平洋諸島では先生は釣針が編年材料となることに注目された。太平洋諸島で出土する釣針は①骨や貝など、一つの材料ですべてを作る単式釣針、②柄と針先を別々に作り基部を糸で結びつけた組み合わせ釣針、③幾つかの異なった素材を複合して作る複合式釣針と呼ばれる疑似餌針の3種があり、これらの出土の様子により編年を立てるのである。

私が太平洋諸島のネズミによる被害調査研究に取り組んだのは、教え子の結婚式の披露宴で、たまたま隣に座った司式の牧師先生が父の古い友人で、私が何をやっているのか、との問いにネズミの研究をやっていると答え、取り組んでいる実験動物のネズミについて説明したのだが、その先生はネズミと言えは野生のネズミのことと思込まれ、その先生方が戦前からミクロネシアのポナペ島に宣教師を送り込んでいること、宣教師達が自給のために何を栽培してもネズミに食べられてしまう、何とかならないか、とのことであった。その頃私は獣医科大学の助教授で、教授は野生動物全般に詳しい方だったので、その話をしたら、面白い、やってみようとなり、三島にある国立遺伝研の先生方を巻き込んで、太平洋諸島のネズミの生息状況、農作物への食害、レプトスピラ症や広東住血線虫などの感染症被害などを調査するというので科研費の申請をしたところ通ったので、81・82年の2年間にわたり行く先々でわなを仕掛けてネズミを捕って回った。その頃ミクロネシアでレプトスピラ症による死亡例が報告されていたので、設備が利用できる場所では捕まえたネズミの採血をして血清を取って持ち帰り、レプトスピラ抗体を調べたり、解剖して肺の中の広東住血線虫を確認したり、野菜やココヤシの実の被害実態を調べたり、とにかく面白い学術調査であった。

太平洋諸島では昔からネズミを食べる習慣があったことからか、各地にネズミに関する伝説があるが、中でもネズミとタコの伝説が多い。ある時ネズミが隣の島に行こうとしたが、行く方法がない。そこでタコを呼び寄せ、上手いことを言って背中に乗せてもらって隣の島に渡った。ところが、島に渡ってしまうとネズミは、タコに「やーい、だまされた」と言って小便をかけて逃げて行った。恨みに思ったタコは以来、ネズミを見ると襲いかかる、というのである。そのことから人々はホシダカラという大きさ7~8 cm位のタカラガイの下に木の枝で鉤を付け、ネズミのしっぽのようにしたルアーでタコ捕りをするという。すなわち典型的な複合式釣針である。私達はネズミの研究の延長としてそのようなネズミにまつわる伝説と、そのしるしとしての釣針について面白いと思ったので、ホノルルに行った際にビショップ博物館に連絡を取って篠遠先生にお目にかかり、この伝説を基にした漁法のルアーを見せていただきたいとお願いした。すると先生は研究室の資料庫の引き出しに集められた沢山のネズミを模したルアーを見せて下さった。島によって多少の違いはあるものの、貴重なコレクションを見て私達は驚嘆させられたものだった。

その際、私達がネズミの専門家であることを知った先生は、各地の遺跡から出土したネズミの下顎骨を調べて欲しい、もしこれがクマネズミのものであったら素晴らしいのだが、とのことであった。1977年に先生はタヒチ周辺の島で大洋の長距離航海に用いた大型カヌー

の残骸を発見したが、もし出土したネズミの骨がクマネズミ (*Rattus rattus*) の骨であれば、長い航海の間船の中にネズミが隠れていられる、もっと大型のカヌーの存在が推察される、というのである。調べてみたら出土したネズミの骨はすべてナンヨウネズミ (*R. exulans*) であって、先生が思い描かれていたような巨大なカヌーの存在を否定する物であった。すなわち、クマネズミは人の移動に伴って移り住むが、ナンヨウネズミは何故か太平洋諸島のどんな小さな無人島にも棲みついている。ナンヨウネズミがどこにでもいることの不思議さについてはまだ解明されていない。

私達が興味を持ったネズミを模した釣針から、遺跡から出土したネズミの骨の鑑別にまで話が飛んだが、その間、篠遠先生は温厚なご様子で、熱心にこれまで取り組んでこられた研究成果などについてお話し下さり、私達はすっかり聞き入ったものであった。その後新聞で、先生がニューヘブリデス諸島のバヌアツの遺跡で縄文式土器を発見され、結局日本から6000 km離れたバヌアツへの漂流・漂着の可能性を示唆するものと考えておられる、との報道を見て、その時も懐かしく先生との会合を思い出したものであった。

先生は今天国で新たな遺跡を発掘しながら、太平洋諸島のことなどを思っておられるのだろうか。心から先生が天国で安らかならんことを祈っている。